

1
王女
聖徒伝 206

契約の恵みに 生かされて

エステル記1～2章

エステル・王妃となる

アウトライン

0. イントロダクション

I. 王の失態、王妃の失脚 1章

II. エステル、王妃になる 2章

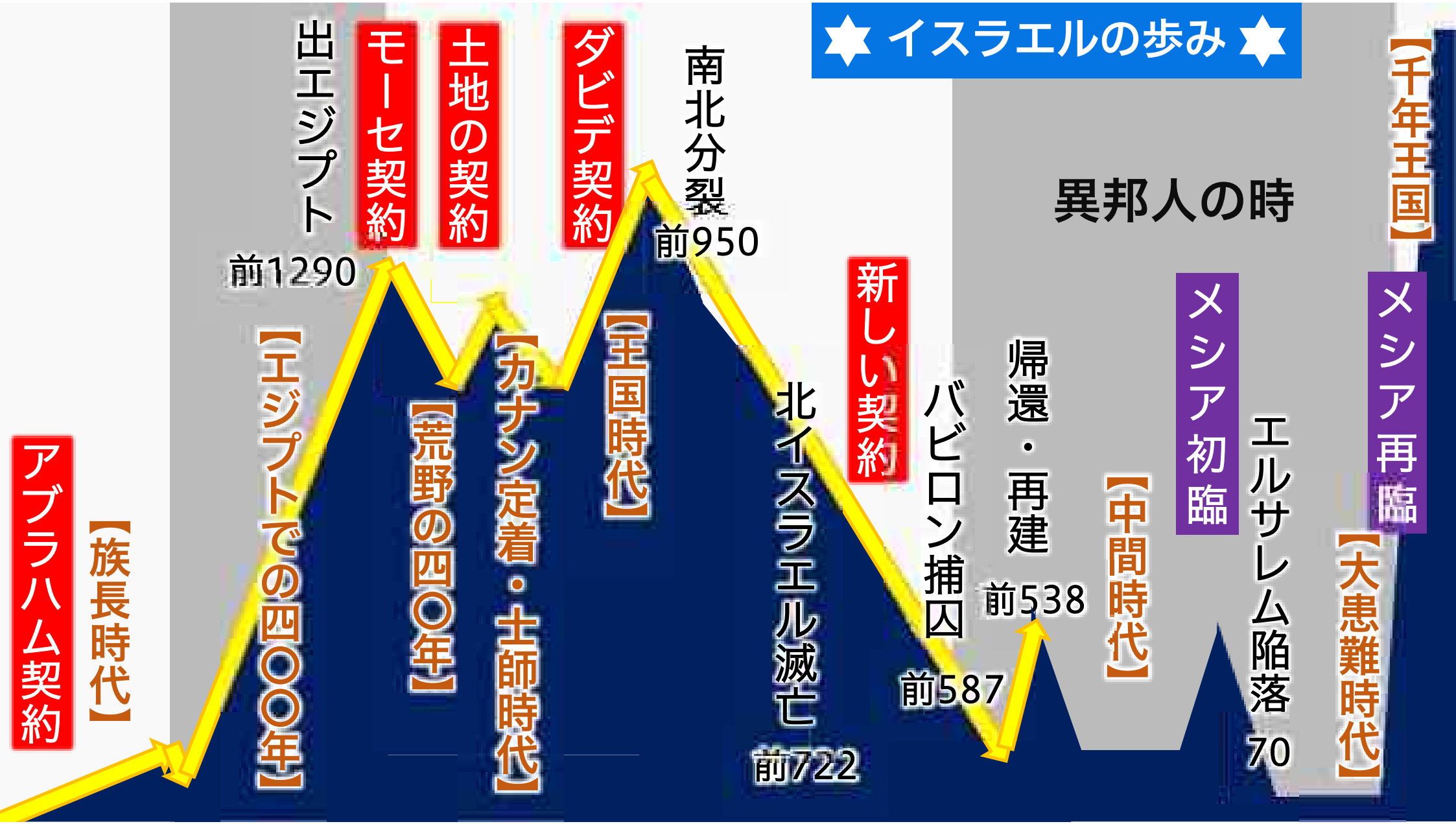
III. まとめと適用

イスラエルの契約の神を
たたえよう



スサ近くの河畔の遺跡

★ イスラエルの歩み ★



アブラハム契約

【族長時代】

【エジプトでの四〇〇年】

モーセ契約

【荒野の四〇年】

土地の契約

【カナン定着・士師時代】

ダビデ契約

【王国時代】

南北分裂

北イスラエル滅亡

前950

新しい契約

バビロン捕囚

前587

帰還・再建

前538

【中間時代】

エルサレム陥落

70

メシア初臨

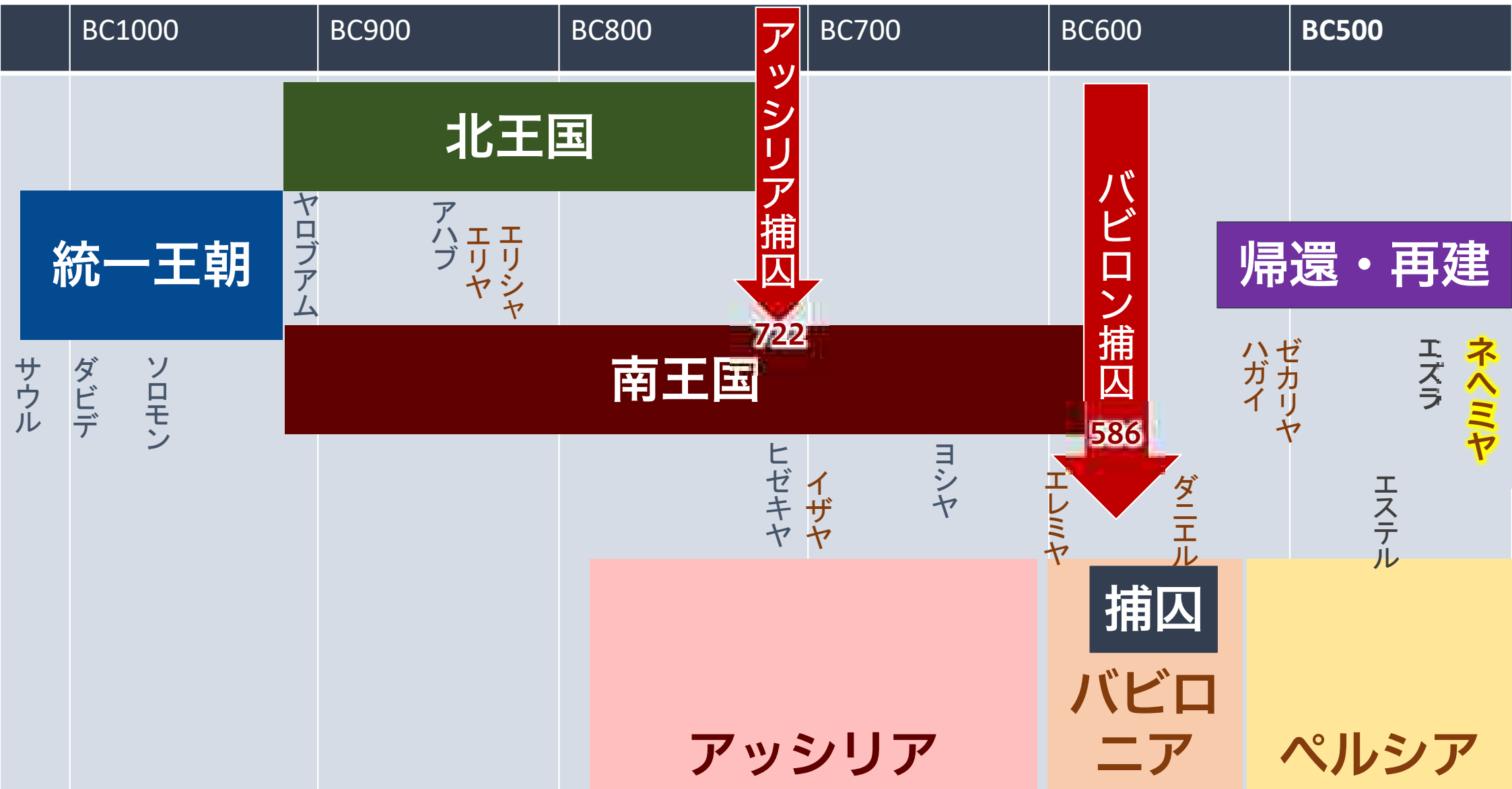
【大患難時代】

メシア再臨

【千年王国】

異邦人の時

イスラエル王国史



年代表 捕囚後の時代

年代	イスラエル	ペルシア
前538年	約5万人が帰還 ゼルバベル	バビロン陥落 キュロス王の布告
前520年	ハガイ ・ ゼカリヤ の帰還	ダレイオス王 第2年
前515年	神殿の完成	
前486年～ (52年後)		エステル がペルシヤの王女に クセルクス王
前458年 (80年後)	エズラ のエルサレム到着 律法の確認・霊的覚醒	アルタクセルクス1世
前444年 (94年後)	ネヘミヤ が帰還・城壁再建	

エズラ記

アケメネス朝 ペルシア帝国



エルサレム

バビロン

スサ

ペルセポリス

エジプト

アケメネス朝ペルシャ

- バビロニアを倒し、古代オリエント最大の世界帝国を建てる。
- ダレイオス1世の時代には、インドからエジプトまでを支配。
- ダレイオス王～クセルクセス王は、ギリシャ侵略を企てるも、相次いで敗戦(490～479年)。

➡ エステル記は、ギリシャ遠征失敗から3年後の出来事

大きく傷ついた帝国の威信を取り戻す必要があった!!

エステル記の特殊性

- ヤハウエの名が一度も出て来ない。完全に外国が舞台。
- 女性の名が書名に。(ルツ記とエステル記のみ)
- 新約聖書に引用がない。
- モーセの律法への言及がない。
- 祈りへの言及がない。断食を行ったとは記されているが…。

異国にとどまった不信仰の民の物語 → 際立つ神の憐れみ



Ⅰ. 王の失態・王妃の失脚

エステル記1章

ペルセポリスの遺跡

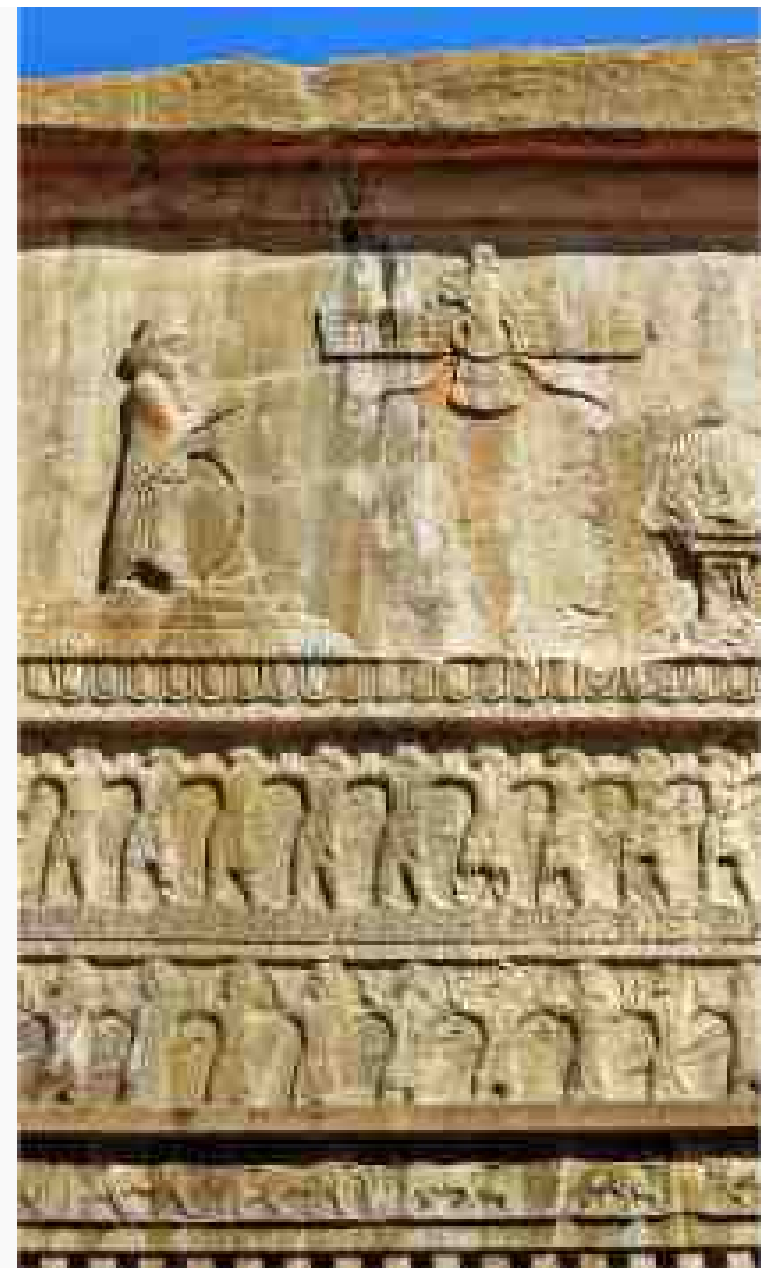
宴会 王の栄光 エステル1:1～4

クセルクセスの時代、クセルクセスが、インドからクシュまで百二十七州を治めていた時のことである。

クセルクセス王がスサの城で、王座に着いていたころ、その治世の第三年に、彼はすべての首長と家臣たちのために宴会を催した。それにはペルシアとメディアの有力者、貴族たち、および諸州の首長たちが出席した。

王は彼の王国の栄光の富と大いなる栄誉を幾日も示して、百八十日に及んだ。

➡ギリシャとの開戦が検討された宴会？



宴会 王宮の園の宮で エステル1:5

この期間が終わると、王は、スサの城にいた身分の高い者から低い者に至るまでのすべての民のために*、七日間、王宮の園の庭で宴会を催した。

白綿布や青色の布が、白や紫色の細ひもで大理石の柱の銀の輪に結び付けられ、金と銀でできた長椅子が、緑色石、白大理石、真珠貝や黒大理石のモザイクの床の上に置かれていた。

* 古都スサの全住民が招待



宴会 ぶどう酒 エステル1:7~8

金の杯で酒がふるまわれたが、その杯は一つ一つ種類が違っていた。王室のぶどう酒は、王にふさわしく豊かにあった。

しかし飲酒は、「強要しないこと」という法に従っていた。だれでもそれぞれ自分の思いのままにさせるようにと、王が宮廷のすべての長に命じていたからである。



宴会 王の命令 エステル1:9

王妃ワシュティも、クセルクセス王の王宮で
婦人たちのために宴会を催した。

七日目に、クセルクセス王はぶどう酒で心が
陽気になり、王に仕える七人の宦官メフマン、
ビゼタ、ハルボナ、ビグタ、アバグタ、ゼタル、
カルカスに命じ、王妃ワシュティに王冠をかぶ
らせて、王の前に連れて来るようにと言った。
彼女の容姿がすばらしかったので、その美しさを
民と首長たちに見せるためであった。



宴会 宴会の顛末 エステル1:12~13

しかし、王妃ワシュティは宦官から伝えられた王の命令を拒み、来ようとはしなかった。そのため王は激しく怒り、その憤りは彼のうちで燃え立った。

そこで王は時を熟知している、知恵のある者たちに言った——このように、法令と裁判*に詳しいすべての者に諮るのが、王の慣わしであった。

*ペルシア王の権限は、法により制限

➡バビロニアのような絶対的王ではない



諮問 王妃の処分 エステル1:14~15

王の側近はペルシアとメディアの七人の首長たち、カルシェナ、シェタル、アダマタ、タルシシュ、メレス、マルセナ、メムカンで、彼らは王の面前に控えながら、王国の最高の地位に就いていた——

「王妃ワシュティは、宦官によって伝えられたクセルクセス王の命令に従わなかった。法令にしたがって、彼女をどう処分すべきか」



諮問 王妃の罪 エステル1:16~17

メムカンは王と首長たちの前で答えた。「王妃ワシュティは王一人だけではなく、クセルクセス王のすべての州の全首長と全住民にも悪いことをしました。

王妃のことが女たちみなに知れ渡り、『クセルクセス王が王妃ワシュティに、王の前に来るように命じたのに、来なかった』と言って、**女たちは自分の夫を軽く見る***ようになるでしょう。

***王の威厳の回復が重大問題!!**



諮問 王への提案 エステル1:18~19

今日にでも、王妃のことを聞いたペルシアとメディアの首長の夫人たちは、王のすべての首長たちにこのことを言って、並々ならぬ軽蔑と怒りが起こることでしょう。

もし王がおよろしければ、ワシュティはクセルクセス王の前に出てはならない、という勅令をご自分でお出しになり、ペルシアとメディアの法令の中に書き入れて、変更することのないようにされてはいかがでしょうか。王妃の位は、彼女よりももっとすぐれた者にお授けください。



諮問 詔勅 エステル1:20~22

王が出される詔勅がこの大きな王国の隅々まで告げ知らされれば、女たちは、身分の高い者から低い者に至るまでみな、自分の夫を敬うようになるでしょう。」

この進言は王と首長たちの心にかなったので、王はメムカンの言ったとおりにした。

王は、王のすべての州に書簡を送った。各州にはその文字で、各民族にはその言語で書簡を送り、男子はみな一家の主人となること、また自分の民族の言語で話すこと*を命じた。

*ペルシアが統治の原則とした融和策





II. エステル、王妃になる

エステル記2章

ペルセポリスの遺跡

提言 王妃捜し エステル2:1～2

これらの出来事の後、クセルクセス王の憤りが収まると、王はワシュティのこと、彼女のしたこと、彼女について決められたことを思い出した。

王に仕える侍従たちは言った。「王のために容姿の美しい未婚の娘たちを探しましょう」

- ワシュティが忘れられない王のため、新たな王妃捜しが提案された。



提言 王妃候補の招集 エステル2:3~4

「王は王国のすべての州に役人を任命し、容姿の美しい未婚の娘たちをみな、スサの城の後宮に集めて、女たちの監督官である王の宦官ヘガイの管理のもとに置き、化粧品を彼女たちに与えるようにしてください。

そして、王のお心にかなう娘を、ワシュティの代わりに王妃としてください。」このことは王の心にかなったので、彼はそのようにした。



ルーツ モルデカイ エステル2:5～6

スサの城に一人のユダヤ人がいて、その名をモルデカイ*と叫んだ。この人はヤイルの子で、ヤイルはシムイの子、シムイはベニヤミン人キシュの子であった。

このキシュは、ユダの王エコンヤと一緒に捕らえ移された捕囚の民とともに、エルサレムから捕らえ移された者であった。エコンヤはバビロンの王ネブカドネツアルが捕らえ移したのであった。

*バビロン捕囚の4代目、王に仕える一人。



スサ近郊の遺跡

ルーツ エステル エステル2:7

モルデカイはおじの娘ハダサ*、すなわちエステル*を養育していた。彼女には父も母もいなかったからである。この娘は姿も美しく、顔だちも良かった。モルデカイは、彼女の父と母が死んだとき、彼女を引き取って自分の娘としていた。

*“ミルトス” * “星”



ミルトス

準備 スサの後宮で エステル2:8

王の命令、すなわちその法令が伝えられて、多くの娘たちがスサの城に集められ、ヘガイの管理のもとに置かれたとき、エステルも王宮に連れて行かれて、女たちの監督官ヘガイの管理のもとに置かれた。

この娘はヘガイの目にかない、彼の好意を得た。彼は急いで化粧品とごちそうを彼女に与え、また王宮から選ばれた七人の侍女を彼女に付けた。また、ヘガイは彼女とその侍女たちを、後宮の最も良いところに移した。



準備 秘密 エステル2:10~11

エステルは自分の民族も、自分の生まれも明かさなかった。モルデカイが、明かしてはいけないと彼女に命じておいたからである。

モルデカイは毎日、後宮の庭の前を行き来し、エステルの安否と、彼女がどうされるかを知ろうとしていた。



ペルセポリスの遺跡

準備 十二ヶ月の期間 エステル2:12

娘たちは、女たちの規則にしたがって、十二か月の期間が終わった後、一人ずつ順番にクセルクセス王のところに入っていくことになっていた。準備の期間は、六か月は没薬の香油を、次の六か月は香料と女たちのための化粧品を用いて化粧することで、完了するのであった。

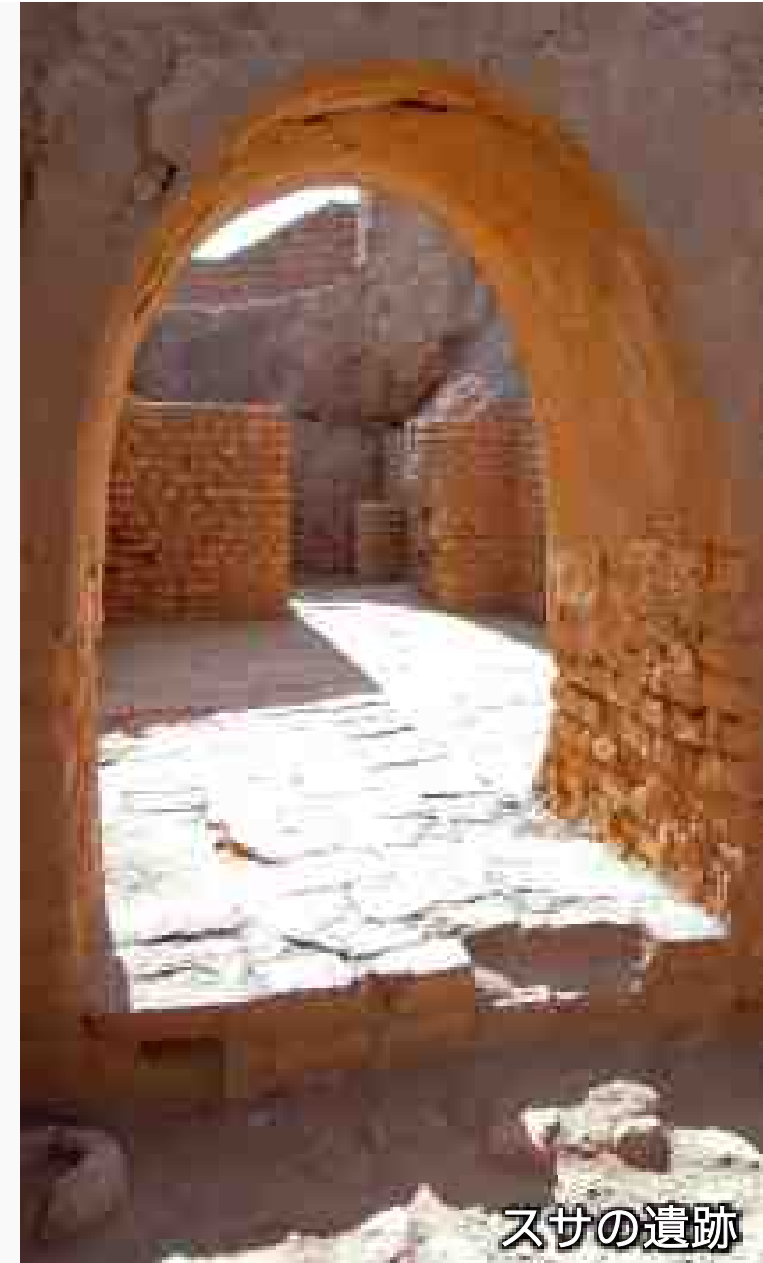
このようにして、娘が王のところに入っていくとき、その娘の願うものはみな与えられ、それを携えて後宮から王宮に行くことができた。



準備 第二の後宮 エステル2:14

娘は夕方入って行き、朝になると第二の後宮に帰ることになっていた。そこは、側女たちの監督官である、王の宦官シャアシュガズの管理のもとにあった。その女は、王が気に入って指名されるのでなければ、二度と王のところには行けなかった。

■ 王の寵愛を受けなければ、二度目はない。



準備 召し入れ エステル2:15～16

さて、モルデカイが引き取って自分の娘とした、彼のおじアビハイルの娘エステルが、王のところに入って行く順番が来たとき、彼女は女たちの監督官である、**王の宦官ヘガイの勧めたもののほかは、何一つ求めなかった***。こうしてエステルは、彼女を見るすべての者から好意を受けていた。

エステルが王宮のクセルクセス王のもとに召し入れられたのは、王の治世の第七年の第十の月、すなわちテベテの月であった。

***特別なものは何も求めなかったエステル**



スサの後代の遺跡

宴会 王の寵愛 エステル2:17~18

王はほかのどの女よりもエステルを愛した。このため、彼女はどの娘たちよりも王の好意と寵愛を受けた。王は王冠を彼女の頭に置き、ワシュティの代わりに彼女を王妃とした。

それから、王はすべての首長と家臣たちのために大宴会、すなわちエステルの宴会を催した。諸州には免税を布告し、王にふさわしい贈り物を配った。

■ 王の正妻の立場を得たエステル



事件 王の門で エステル2:19～20

娘たちが二度目に集められたとき、モルデカイは王の門*のところに座っていた。

エステルは、モルデカイが彼女に命じていたように、自分の生まれも自分の民族も明かしていなかった。エステルはモルデカイに養育されていたときと同じように、彼の命令に従っていた。

*王の行政機関

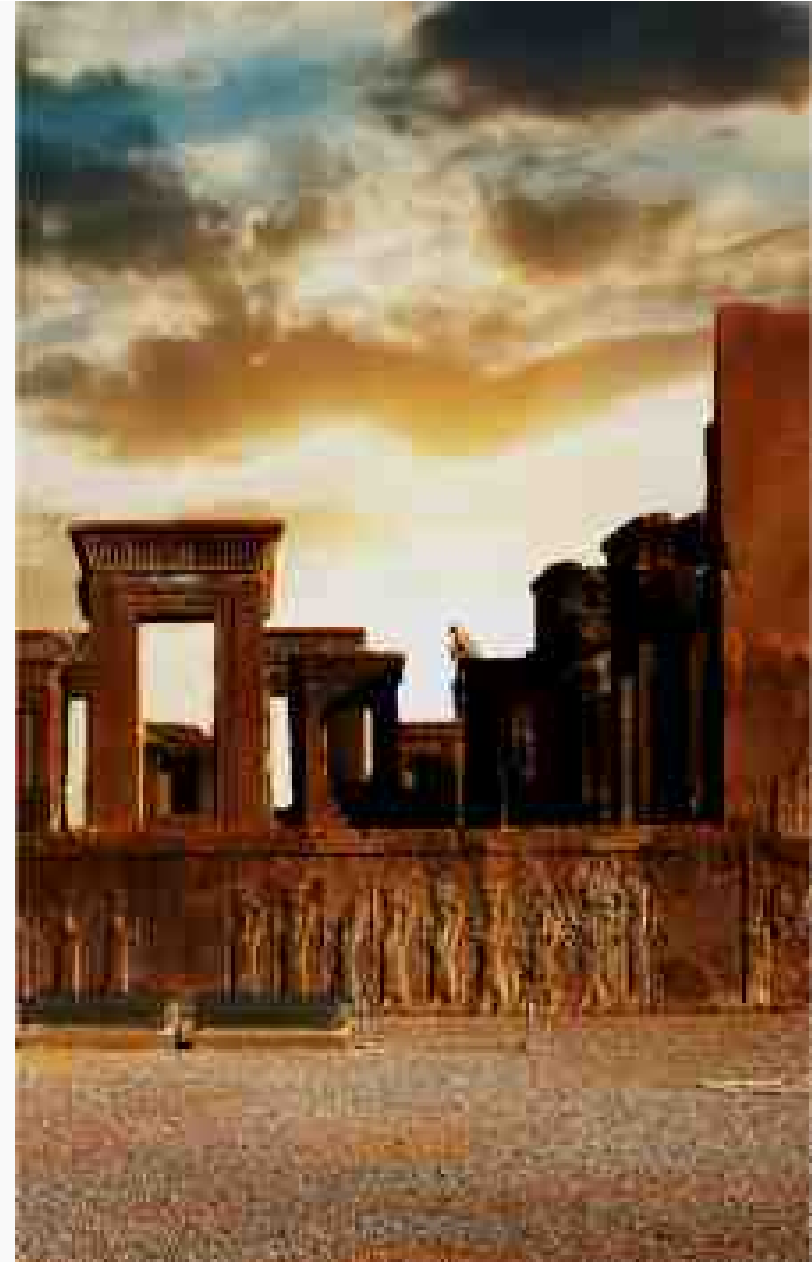


ペルセポリスの遺跡

事件 謀反 エステル2:21

そのころ、モルデカイが王の門のところに座っていると、入り口を守っていた王の二人の宦官ビグタンとテレシュ*が怒って、クセルクセス王を手にかねようとしていた。

*前王妃ワシュディ派の者という説も



事件 顛末 エステル2:22～23

このことがモルデカイの知るところとなり、彼はこれを王妃エステルに知らせた。エステルはこれをモルデカイの名で王に告げた。

このことが追及され、その事実が明らかになったので、彼ら二人は木にかけられた。このことは王の前で年代記に記録された*。

*後の出来事の伏線に





IV. まとめと適用

イスラエルの契約の神をたたえよう

現在のスサ

王の絶対的権威について知っておこう

- 「王」とは、神によって定められた**絶対的な君主**。
- 王のお心 = 国家の意思。 **誰も逆らえない**。
- ダビデ王の罪は、王だからこそ犯し得た罪。
→ 命令一つで、誰でも呼びよせられるし、動かせる
- イスラエルの王は、神の律法への従属を求められた。
ペルシアにおいても、唯一、法が、王を縛った。

ダニエルの預言と帝国の変遷

■ ダニエルが解き明かした、バビロン王の夢。

→ 金、銀、銅、鉄でできた継ぎはぎの銅像

- | | | |
|----|--------|--------------|
| ①金 | …バビロニア | …絶対的王権。 |
| ②銀 | …ペルシア | …王権への法による制限。 |
| ③銅 | …ギリシャ | …議会。民主制。 |
| ④鉄 | …ローマ | …王なき共和制。 |

■ 王権は次第に弱体化 → 反キリストが君臨

→ 反キリストを倒すのが、**真実の王キリスト**



主の名が記されないエステル記

- 最も信仰深い民は、解放直後に帰国(第一次帰還)
 - ➔残ったのは、信仰より安定した生活をとった者たち
- 淡々と記される事実から浮き上がる、背後に働く**神の御手**。
- 民の不信仰にもかかわらず、主は民を見捨てられない。
 - ➔アブラハムと結ばれた**神の契約の恵み**のゆえ

神の恵みの契約が、イスラエルを守り続けた

主の恵みを確認しよう

- 主の恵みは、確かな**契約に基づく恵み**。
- アブラハムへの**契約ゆえ**、イスラエルは見捨てられない。
- ただ福音を信じて、神の**恵みの契約に接ぎ木された**私たち。
 - ➔ 一度与えられた救いは、決して失われることはない。

救いの確信は、神の契約の恵みの上にこそ与えられる

不信仰の中でも保たれたイスラエルのルーツ

- 主の名も、律法も、祈りの言葉もない。
それでも、神の民のルーツだけは忘れていないイスラエル。
- 通常、3代にもなれば、その地の文化に同化する。
モルデカイは、捕囚から数えて、すでに4代目。
流浪し、憎悪にさらされても、ルーツを忘れられなかった。
 - ➔ 主ご自身が、ご自身の民を保たれた。
 - ➔ 「奇跡の民」

★ イスラエルの契約の神をたたえよう ★

- 10・7のテロ以降、世界的に高まる反ユダヤ主義。
理不尽な憎悪の中、必死に戦うイスラエルを覚えて祈ろう。
患難期が来るまで、憎悪が増す一方、平和も保たれる。
- 救いは、信仰と恵みによる。主の永遠の約束が土台にある。
イスラエルを中心とした、神の約束に基づく歴史をよく学ぼう。
- 去りゆく一年の恵みに感謝しつつ、来たるべき年にも、
変わらぬ契約の恵みに生かされていくことを確認しよう。

成し遂げられた恵みに感謝し、確かな将来を喜び歩もう

てん とう つみ
「天のお父さま。わたしの罪をゆるしてください

かみ こ
わたしは、神のみ子イエス・キリストが、

① わたしの罪を贖うために十字架で死に、

はか ほうむ
② 墓に葬られ、

みっかめ ふっかつ しん
③ 三日目に復活したこと、を信じます。

いこく ち ふしんこう しゅ まも つづ
異国の地の不信仰のイスラエルすら、主に守られ続けました。

しゅ やくそく もと たし めぐ わたし あじ
主の約束に基づく確かな恵みを、この私にも味わわせてください。

す いちねん みちび まも ところ かんしゃ
過ぎゆく一年のお導きとお守りに、心から感謝いたします。

あら とし とも しゅ へいあん うち むか
新たな年を、共におられる主の平安の内に迎えさせてください。

しゅ な いの
主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」